

2022年10月28日(金)、30日(日)快晴

## 日光街道つまみ歩き (その2)

### 栗橋—古河(10/28)、及び古河散策(10/30)

本年6月初めに東海道を踏破し、小休止の後、今度は日光街道に挑戦している。但し日光街道については無理をせず、途中を適宜飛ばしながら、良さそうなところだけ歩くというつまみ食い歩き(つまみ歩き)で日光を目指している。今月4日に第1回として日本橋から千住まで歩いたのを受けて、今回は栗橋—古河間に挑戦した。ここを選んだのは友人吉田清直さんの歩行記録で古河の歴史博物館等が素晴らしいとあったからである。自宅から駅への往復も含めて歩数は23237歩、歩行距離はスマホ情報では12.9キロとあるが、案内書で栗橋—古河間を見ると7.4キロしかない。この大きな差の原因は不明である。スマホで前提にしている歩幅と実際が大きく違っているせいかもしれない。

西大井発8時36分発の湘南新宿ライン宇都宮行きに乗り、10時前に栗橋到着、乗り換え無しなので便利だ。幸子の腰痛があるので大事をとって往復共にグリーン車にした。10時10分から歩き始める。暑くも寒くもない快適な気候だ。歩き出してすぐに「静御前の墓」がある(写真1)。周知の通り義経は兄頼朝の不興を買い平泉に落ち延びたが、ここにあった解説によると、義経の寵愛を受けた静御前はこれを追って京から平泉を目指す途中病を得てこの地で亡くなったとある。栗橋駅の構内で静御前の名を冠した食べ物の広告が大きく掲示されており、何のことかと思ったらこう言う次第であった。

10時45分に利根川に架かる利根川橋を渡る。安心して歩ける歩道がついている。栗橋は埼玉県だが渡り終えると茨城県の古河であり、暫く行くと案内板がある。読んでみると、ここは日光街道中唯一関所と渡船場のあった場所だそうだ(関所は後に対岸の栗橋側に移された)。続いて11時過ぎに鶴嶺八幡宮、光了寺、円光寺などに立ち寄る。このうち光了寺には芭蕉の句碑がある(写真2)が読めない。解説書を見ると「いかめしき音や霰(あられ)の檜木笠」と彫ってあるらしい。この先で東北本線の踏切を渡ってその左側に出る。11時40分頃に1630年(寛永7年)植栽の中田の松並木がある。これは立派なものであったらしいが戦時中伐採され、いまは背の低い松が並んでいるだけで、東海道に時々ある由緒あるそれを比較すると見劣りがする(写真3)。

この辺りから空腹を感じ出す、街道沿いには気の利いたレストランや喫茶店は見当たらない。仕方が無いので歩きながら持参したパンを食べる。丁度お昼にローソンがあったので立ち寄って珈琲を飲むが、飲食は外でといわれて坐って休むことが出来ない。12時47分に「日光街道古河宿」と書いた燈籠状の案内燈を過ぎ、午後1時丁度に本日のハイライトで

ある古河歴史博物館着。これまで比較的味気ない道並みであったが、この一角は古河城の出城跡とのことで俄に雰囲気が変わる（写真 4、5）。博物館の建物は平成 4 年の日本建築学会賞、同 8 年の公共建築賞を受賞しており、また、博物館の隣にはおいしいイタリア料理店があるとのことでわくわくしながら博物館に向かう。しかしどうも様子がおかしい。誰も周辺にいないのである。いざ博物館に着いてみると何と休館日、レストランその他も全て閉まっている。実は今週の月曜日に行こうとしたのだがネットで調べたところ毎週月曜日休館とのことだったのでわざわざ今日（金曜日）にしたのだ。窓口の張り紙を良く見ると、なんと毎週月曜日、加えて毎月第 4 金曜日（即ち今日）休館とあり啞然とした。

なんともやりきれない気持ちで未練がましく博物館の周りを回ったりしたが、どうしようもない。帰途につこうと思ってふと見ると、ぬた屋甘露煮店だけが開いている。ここは鮎の甘露煮が有名らしいが、我々は鮎の甘露煮を購入、その序でに近所に良いレストランの有無を聞いたところ、すぐ側に古民家を改装した店（レストラン SUNROSE）があるというので行ってみた。下駄屋さんだった店を改造した、雰囲気のある店でなかなか味わいがある。ハンバーグ定食とカレードリアをそれぞれ頼んだが、特に後者は絶品。ここで店のシェフとその若奥さんと話をしてすっかり良い気分になり、2 時 50 分発の電車で品川経由帰宅した。

#### （その後のフォローアップ）10 月 30 日（日）

上記の通り古河の歴史博物館に入れなかったのがどうも気に懸かる。そこで昨晚決意し、蓮田に住む高校大学を通してクラスもクラブ活動（オーケストラ）も一緒だった赤松 清さんと奥様（光子さん）を誘って、本日古河の文化に触れるのを唯一の目的として、同市を再訪した。結果は極めて満足できるものだった。なお、今回は日光街道を少しも先に進めなかったが、歩行距離は door to door で 13100 歩だった。

9 時前の湘南新宿ラインに乗り、蓮田で赤松夫妻が加わり、10 時 20 分頃古河着、早速歴史博物館目指して歩き出した。博物館近くの美しい街並みに光子さんから感嘆の声が上がる。まずは博物館すぐ手前の鷹見泉石記念館を見る。鷹見泉石（1785~1858 年）は古河藩家老として土井利位（としつら）に仕え、主君に従って大坂（江戸時代はこう書いた）、京都、江戸で活躍し、大坂時代には主君の大塩平八郎の乱の平定等での活躍で名を挙げた。62 歳で古河に隠居後は 1850（嘉永 3）年、新訳和蘭国全図刊行等若い頃からの蘭学研究の集大成をなした他、渡辺崋山その他同時代の学者と交わり、その名を全国に知られた人物。鷹見泉石記念館は泉石隠居後の住居で、現在もそのまま残されている。気品のある建物、部屋、庭園が我々の目を十分楽しませてくれる（写真 6）と同時に、当時の蘭学研究に思いを馳せる。泉石はまた、ペリー艦隊の 2 度目の来訪で世の中が騒然としていた 1854（嘉永 7 年）に、3 年前にアメリカから帰国した中浜万次郎に面談し、海外最新知識を得ている。

次に、満を持してすぐ向いの古河歴史博物館を訪ねる。ここで目をひくのは雪の結晶である。藩主の土井利位は徳川幕府の要職を歴任後老中になるほどの名君であったが、学問・芸術の分野でも才能を発揮し、特に顕微鏡を用いての雪の結晶の研究に秀で、研究の成果を「雪華図説」として刊行するなど雪の殿様の別名を持つほどのひと。この本は博物館にあるが館内は撮影禁止なのでネットから画像を借用（写真 7）。雪の結晶の模様はこの他印籠、着物等多様な分野で利用され（写真 8）、こののち街を歩くと至る所に雪の結晶が表示されているのに気づく。正に古河のシンボルマークである。この他渡辺崋山筆の鷹見泉石の肖像画もあり、これは国宝だ（本物は東京国立博物館にあり、こちらは模写）。という次第でここで古河の文化水準の高さに圧倒される。

もう一つ歴史博物館のエントランスにはオランダ製の巨大な屋外用手回しオルガンがあり、我々の求めに応じて職員が 1 曲奏でてくれた。機械に穴の空いた紙を差し込み、裏で職員が大きなハンドルを一生懸命回して音を出す仕組みで、これも古河の蘭学が引き金になったものだろう。

昼食後、このすぐ横にある古河文学館を訪れる。ここは入ったところに超大型紙製スピーカーをつけた SP レコードプレイヤーがあり、ここで毎月 SP レコード鑑賞会が開かれている。今月は 21 日にハイフェッツとロイヤルフィルハーモニーのメンデルスゾーンのバイオリン協奏曲とあり、偶々現在小生が 60 数年ぶりに練習している曲で是非聴きたかったが、既に終了していて残念。しかし係員が短い 1 曲だけならと言って Verdi の Traviata からソプラノとテノールのアリアをかけてくれたが、ゆったりとした部屋の雰囲気の中で竹針の SP の肉声に近い音色で感激。特に赤松夫人光子さんは武蔵野音大（ピアノ科）時代 Verdi を含むオペラのアリアを声楽科の学生と組んで四国を回ったとのことで感激もひとしおの様子であった。

ここでは①古河ゆかりの文学者、②鷹見久太郎（前記鷹見泉石のひ孫）と絵雑誌「コドモノクニ」、③永井路子、の 3 つの展示室がありいずれも興味深いが、小生は特に「コドモノクニ」の雑誌の絵が美しいのに感銘を受けた。小さいうちにこういう本に親しむことで子供の情操教育は間違いなく進む。また、現在に比べて文字も多い。これで子供が字を覚えるのではないかと思った。

この後短時間だが篆刻美術館を見学し、帰路駅の近くで入ったお茶屋さんでベートーベンの運命がかかっているのビックリ。聞いてみると店主が若い頃好きで集めた LP をかけているとのこと。ここにくるまでに古河の文化の高さをひしひしと感じていたが、ここでとどめを刺された。この後直通電車で帰路につく。

なお、吉田さんお薦めの古河文学館 2 階のイタリアレストランは、コロナの影響で営業を停止しており、残念だった。代わりに 2 日前に入った SUN ROSE でランチをとり、シェフとその奥さんと短時間話をしてきた。 完



写真1 静御前の墓



写真2 芭蕉の句碑



写真3 中田の松並木



写真4\* 古河歴史博物館周辺



写真5\* 古河歴史博物館の佇まい



写真6 鷹見泉石記念館



写真7\* 雪華図説



写真8\* 着物と雪の結晶

\*の出処はインターネット